

助成年度：平成6年度

[所属] 東京大学 医学部人類生態学教室

[役職] 大学院生

[氏名] 仲田奈々子 (他計4名)

[課題]

焼畑農耕民の持続的森林利用に関する研究

—タイ北部山岳民ティン族の焼畑農耕—

[内容]

はじめに

熱帯地域の森林荒廃の原因の一つとして焼畑農耕がしばしば指摘され一方、休閑林利用の周期が適正に守られている限り焼畑農耕は森林破壊には結びつかないというのが近年の有力な説である。本来、自然のリズムにのっとった農耕システムであったはずの焼畑農耕だが、近年の人口増加、貨幣経済の浸透などの社会変化の影響で、十分な休閑期間の確保が困難になり、これまで持続可能であった地域においてもその危機が指摘されてきている。森林荒廃は、焼畑農耕民にとって食糧生産が不確実なものとなる可能性が高く、集団としての存続にも関わってくる。

本研究は、水田耕作が禁忌とされるティン族のなかでも、伝統的ライフスタイルが保持されているパッカム村を調査地を選び、現在の焼畑農耕活動における適応機構を明らかにし、近代化と関連した将来の変化について考察することを目的とした。

調査地・対象・方法

ティン族は、言語学的にはモン・クメール系に属し、タイのナーン県とラオスのサイナブリ県にまたがる地域の先住民で、総人口は7万~9万人といわれている。調査地は、タイ北部ナーン県ポークルア郡パッカム村(北緯19°4'、東経101°9'、標高約1,200m)で、17世帯、人口157人(男性77人、女性80人)であった。

調査方法は、調査地に住み込み、参与観察法とインタビューにより、休閑期間、耕作方法、栽培作物、生計活動、食物摂取の調査を行った。健康状態の把握のため身体測定と尿検査(濾紙法)を行い、尿は熊本大学医学部公衆衛生学教室で分析した。採取した植物サンプルは、チェンマイ大学理学部に依頼し同定した。

結果と考察

パッカム村の焼畑の特徴として、1)6~8年の休閑期間の維持、2)トウモロコシ・ヤムイモ・タロイモなどの根茎類の混作による食糧の安定供給への寄与、3)イネ・トウモロコシ・ヤムイモの種の多様性の保持、4)居住環境の動植物資源の有効利用が明らかになった。また、環境への生計活動の適応の指標の一つである健康状態は、身体測定、尿検査による蛋白質摂取量の推定から、良好と判断された。

パッカム村ではティン族の社会・文化的特徴である、1)妻方居住制および拡大家族制に結びついた母系社会システム、2)精霊信仰(特に生計活動に強く結びつく稲魂信仰)、3)伝統的文化に基づいた社会規制および行動規制が、生計活動と密接に結びつき、労働の相互扶助を支えていることが明らかになった。これら様々な行動規制および社会システムは、自然条件に左右されやすい焼畑農業と自然を敬い畏れる精霊信仰が結びつき作り上げているのではないかと考えられる。また、この自然への畏怖の念は、森を守ることにもつながり、乱伐などの環境破壊をくい止めているとも考えられる。

パッカム村における焼畑農耕は、その休閑期間と人口のバランスなどから持続可能と判断されたが、この

地域の村々で換金作物用の常畑化が始まり、貨幣経済が浸透してきた今日、パッカム村の変容も否めない。しかし、今後の自然と人間の共生を求める場合、種の多様性を維持することと同様、水田耕作を禁忌とするなどの焼畑農耕文化を消し去ることなく、人間の文化の多様性を維持することも大切ではないだろうか。